

ual central saint martins

- 国際ファッション専門職大学: ファッションクリエイション学科
- 2023年卒業生: 浜名悠
- 留学先: イギリス
- 大学名: Central Saint Martins
- コース名: MA Fashion Womenswear (修士号/大学院)

第1回目校費留学レポート目次

- 授業内容
- ロンドンの生活

11月の授業内容



Central Saint Martins 校舎

大学院が始まる二週間前にロンドンに到着し、11月から授業が始まりました。Menswear / Womenswear / Knitwear / Textile Design を含むMA Fashionのコースは合計30名程で構成されており、想像していたよりも少なく驚きました。最初は「表面的で無い個人的文化アイデンティティ」というテーマの自己紹介を含むプレゼンテーションから始まりました。自身のバックグラウンドや影響を受けたアーティスト、デザイナー、作品、ファッション、プロダクトを紹介しました。このコースには多国籍なメンバーが集まっているため、多様な文化とそれぞれのキャリアなどを見ることができ、とてもいい機会でした。



そしてすぐに一つのコレクションを制作するFashion Nowというプロジェクトが始まりました。私たちは何を見て、何を感じるか。今、何が重要で、何を言うべきか。デザイナーは周囲の世界に反応することが前提とされていますが、デザインにおいて私たちの視点、方向性、意思決定の一部として、どのように周囲の世界を含めるのか、という試みです。Psychogeography (心理地理学: 地理的な位置が都市体験に及ぼす影響) というワードを基に、生徒それぞれがロンドンの各エリアを割り当てられ、そこでの偶発的な都市体験を通じて作品制作をします。私はBrixtonという場所を調査することになりました。このプロジェクトの条件は、事前のアイデアや計画を持ち込むことは禁止であり、その場で五感を使った主観的で解釈的な知覚を使うことなので、私は気に止まったオブジェクトや自然現象などを記録していきました。現在はそこから発展させてコレクションのコンセプト決め、アイデンティティ、テクスチャ、シルエット、カラーパレット、サステナブルアプローチ、プロポーションなどのリサーチとアウトプットを多角的に取り組んでいます。このような複雑な思考プロセスは私が大学生の頃にやっていた方法とは異なる部分がありますが、チューターのアドバイスも取り入れて挑戦しています。何度も実験と失敗を繰り返し、そこから生まれるものがどのようなものになるか自分でも楽しみな部分があります。私はBrixtonでの経験を通じて、カモフラージュという言葉をコンセプトに現在コレクションを制作しています。

コラージュワーク / デザインプロセス

ロンドンでの日常生活

授業時間外は、友達や先生とご飯に行ったり、街を散策したり、図書館や美術館、マーケットに行ったりととても充実しています。日本と比べて物価がとて高く、生活費の出費が多い状況なのでパートタイムの仕事を今は探している状況です。私は大学生の時から楽曲制作にも取り組んでいるので、初めてロンドンのスタジオに入りました。日本のスタジオと違って無人で管理されており、値段もさほど高くなく、足を運びやすい印象でした。そして友人の紹介もあり、ロンドン拠点のアーティストと繋がることができたり、他にはファッションイベントへ招待させていただきました。ロンドンでのコネクションもとても大切にしていきたいです。現在はコレクションの制作が大変ですが、ロンドンにいる貴重な時間を今後も存分に楽しんでいきたいと思っています。

